



函館からトラスト



Dec.2005 No.23

公益信託 函館色彩まちづくり基金 平成16年度助成活動が決定

第12回は6件の助成が決定

平成17年2月19日(土)午後1時30分から函館市末広町にある五島軒において、第21回運営委員会が開催された。7名の運営委員により、平成16年度助成先の選考がおこなわれた結果、7件の申込みに対し、5件の助成が決定した。その後に平成15年度の助成を受けた6団体による報告がなされた。ビジュアルでわかりやすく活動の様子が説明され、楽しい雰囲気の中に爽やかな最終報告会を終えた。

	基金助成団体 代表者	助成希望テーマ	希望金額	助成金額
1	はこだてフォトアーカイブス はこだて写真図書館 代表者 津田 基	大正・昭和初期函館市の町並み風俗をとらえた 熊谷幸太郎の写真資料作製	50万円	25万円
2	函館デザイン協議会 代表者 渡辺 譲治	「西部地区の建築絵本」の原画作成	60万円	25万円
3	じろじろ大学出版局 代表者 田村 昌弘	じろじろ大学出版事業のための準備経費	60万円	25万円
4	函館こども劇場 代表者 和泉 佳代子	子供の情操や感性を養うために欠かせないとされる生の舞台を届けるため、児童劇団による舞台公演を実現したい。	30万円	
5	ペンキ塗りボランティア隊 代表者 花本 達郎	町家ペンキ塗りワークショップ・XII	40万円	40万円
6	函館町子 代表者 野口 志乃	住みたい！働きたい！みんなに見せたい！ 「函館町家」づくり	48.75万円	35万円
7	函館道化師塾 代表者 高橋 順一	市民サーカス創る会の一環として函館道化師塾でのボランティア活動	10万円	
計			7件 約298万円	5件 150万円

●運営委員より● 《からトラスト報告会に参加して》

2月19日(土)に開催の報告会は、当日欠席の助成1団体を除き、どの団体もパワーポイントを活用してのわかりやすい成果報告であった。また、欠席団体も、しっかりとした報告書を配布していて、成果の内容を理解することができた。「西部地区の建築絵本」は、楽しいイラストやデザインから、今後の展開に期待したい。「West Guide & Map 制作プロジェクト」も、知られざる西部地区の魅力を引き出せる有効な方策の一つとして興味深かった。

ただ、引き続き助成を希望している団体については、この報告会が終了してから助成金交付先を選考す

るほうが、より連続性を期待できるし、助成対象の事業に対しても、運営委員会としての希望を附託できるのではないかと感じた。

さらに、せっかくの報告会であるので、助成団体には是非参加してもらうべきであると考え、たとえば補助金予算には必ず報告会出席の旅費等を当初から計上することとし、かつ報告会がもっと公開されて、函館のまちづくりに刺激と活性化へのはずみになる機会に昇華できればとも思えた。

(北海道大学教授 角 幸博)

函館まちなか研究会は函館西部地区の空き家や空き地を実測、またそれらの権利等の調査を行った。また市内の大学生を対象にその地域における居住に関するアンケートを行った。空き地の地主や空き家の所有者との意見交換などきめ細かな対応を基に、実際に空き地や空き家の利用を提案し

た。専門家も加わった緻密な活動内容だけに、居住促進の事例・計画も説得力を持ったものとして参加者に受けとめられた。今後これらの研究活動がますます充実して、西部地区に住みたい人々の夢や希望の実現の味方になることを願う。

ハコダテまちなかオープンスクール

平成17年3月5日・6日の両日、弥生小学校と「BAYはこだて」で、「見る・知る・考える・つながる」をキーワードに、「まちなか」ににぎわいを生み出す方法、空き家・空き地をよみがえらせる方法など、全国各地から専門家が集まり、市民の皆さんと一緒に西部地区の魅力を探り、考え、話し合う学校・オープンスクールが開校された。

公開授業には130人が参加、西部地区を探検、大正初期の空き家の内部を見学した。あらためて「まちなか再生」の出発点をどこに置くのか考えさせられた。

歴史の中ではぐくまれた西部地区のコミュニティは、函館の「まちの手本」なのだ。それなのに疲弊している地区の人達がアクションを起こさないのは何故なのだろうか。

住んでいる人達を巻き込みながら再生に取り組む意義を、函館市民全体で共有していく事、そして再生の具体的な事例を作り、積み重ねていく事が、共感の輪を広げる事だと、参加者達は感じたのではないかと考えている。



▲BAYはこだて

NPO法人はこだて街なかプロジェクト
理事長 山内一男(建築家)

ファンナビ編集部

平成15年度助成活動 学生情報誌ファンナビ、ファンナビWebの配信

情報誌名はファンナビ改め、「COTCH!」に改名。この名前は「まちの精神やものとの出会い」の意味を表わしています。「COTCH」のコンセプトを考えた時に函館の特性、特徴である〈食〉を切り離しては考えられないことに気が付きました。この〈食〉についての情報がまちづくりに繋がると考え「COTCH!」を発行しました。新聞やラジオでも取り上げられました。

大学や専門学校、掲載店で配布しましたが、すぐになくなりましたので、若者達に便利で楽しい情報発信として役立つのではと思っています。

公立はこだて未来大学4年
浦 加奈枝



公益信託 函館色彩まちづくり基金に当会が「西部地区の建築絵本のための研究と資料作製」のテーマで応募し、採択され、16年度事業の一つとしてスタートしました。函館・西部地区のまちなみ、建築を紹介するパンフレットに所在地図や写真だけではない、古い建築にもっと親しみを持ったり、興味を示したり、何かイメージを膨らませる様な、もっとワクワクするような表現やメディアがあればどんなにステキだろうなどと、渡辺会長と話をしたのが事の発端かなと思います。16年度総会で特別事業決定され、11名の特別委員会チームを編成しての活動開始となりました。ただ、建築絵本と言っても、そもそも何のための絵本なのか、西部地区の建築の何を、どこを対象にするのか、読者は誰なのか、絵本のストーリーは？絵本の表現方法はどうするの等々、課題・難題山積み状態でどこに向かって走れば良いのやら、最初はそんなこんな整理から始め、改めて目標をチームで模索・検討を重ねました。ネクストの事務所をたびたびお借りして、チーム会議を持ち、半分は楽しみながら？今回の成果を得、2月19日に基金へ結果報告の発表を行い、好意的な評価が頂けたと思います。結果発表の主な内容は次の通りです。

- ①タイトル—はこだてたてものえほん
- ②対象者—一児童から大人まで
- ③主な目的—西部地区の建築物の理解を深めてもらうための副読本的役割を果たしたい。
- ④表現方法—画面に穴を開けて次ページへ進みナンだろう(?)という、ワクワク感効果を持たせる。
 - a. やさしいタッチのイラストで表現
 - b. 建物の素材で繋げる・展開する
 - c. 絵にキャプションを付ける—過去、現在の事、エピソード等を盛り込む。

報告会には試作絵本と表現の一例として、石井裕子氏作成の大正湯のイラストも発表しました。この成果を次年度以降も継続発展させ、本物の函館発建築絵本が出版できればいいな～と思います。

〈函館デザイン協議会ニュース2005Vol. 15より〉

㈱ナカ建築設計
中沢 雅夫



▲作製された資料

★からトラストのホームページがリニューアル★

05年5月、からトラストのホームページが全面リニューアルされました。新着ニュース欄や過去の広報誌「から」のバックナンバーのダウンロードなどの多彩な機能を備えた本格的なものです。これからも活動の案内や活動成果の迅速な報告などにおおいに活用してまいります。ご意見・ご要望をお待ちしています。

<http://www.h-nisshou.com/kara>



青函連絡船で函館に降り立ったのが1977年の秋、東北以北の街は初めてであった。

「若いうちに北国のまちを体験しておきたい」という遊び半分の新卒青二才が恩師のいたずら心に乗ってしまった結果の設計事務所勤務であった。

6年後建築家として独立するにあたり、当然故郷富士市への里帰りを考えていたのだが、函館西部地区の持ったポテンシャル(潜在力)に惹かれ、いつかはここで仕事をしてみたいと思い始め、帰りそびれてしまった、というのが正直なところである。

群居、景観、修景、コミュニティの再生といったキーワードを頼りに、当時から地方のまちを訪ね歩いている。

サーヴェイの候補地は

- 1、未だ全国区のマスメディアにあまり取り上げられていない。
 - 2、行政、住民、建築家の連携がうまくいっている、又は情熱を持ったキーパースンが住んでいる。
- といった独自の選考基準に拠っている。

佐賀県有田町、兵庫県出石(イズシ)町、山形県金山(カネヤマ)町、金沢市、新潟市etc.どこも中心市街地の空洞化あるいは若者の流出の影響は深刻なのだが独自の策を講じ、又まち並みのみならず生活道路の整備がなされ、散策する地元の人々が生き生きと見えるのである。

函館も、港、坂道、エキゾチックな教会、独特な建築群等、これだけ数多くのファクターを有する西部地区がある。それなのに住環境が地域的に広がっていかない。

さて、1998年から2年間、公益信託函館色彩まちづくり基金から助成をいただき「ヒルサイドコーポラティブハウジング・プロジェクト」の活動を続けたが、

当方のフットワークの悪さもあり、成果として形に出来なかった。コーポラティブハウスという事業を成立させるためには、様々な能力を結集する必要があることを改めて思い知った訳である。西部地区の様な丘陵地では等高線に沿ったメインストリートに面するファサードが街路を形成する事になるのであるが、坂道に沿った連続するファサードが考えられる事はほとんどない。坂道は観光客にとって魅力的な散策ルートとなるが、高齢な生活者には疎んじられるバリアとなってしまふ。まち並に潜むこのような矛盾を解消するためにも、二層分以上の標高差のある2本のメインストリートを縦に結ぶ細長い敷地を候補に考えていた。内部に階段、スロープ、エレベーターを備えた半公共のヴォイド(吹き抜け)を取り込むことで、稜線に従ったスカイラインが生れ、居住者に採光と眺望へのメリットが生じる……そんな所からイメージをふくらませていった。

生活道路や公園、店までも含めた住環境に関わる仕事をしていきたいと思っているが、運営委員となり、毎年多数のチームによる様々なテーマに接するのは新鮮であり、思いを新たにすることができる。今後は助成を受けたチームの活動現場にもおじゃまして、議論の場を広げていきたい。又、個人的には「ヒルサイドコーポラティブハウジングプロジェクト」実現に向けてこれからもじっくりと取り組んでいきたいと考えている。

公益信託函館色彩まちづくり基金運営委員、建築家
小澤 武

バル街2005

「函館西部地区を一夜のバル街に」



▲バルIVマップ

04年から始まった「函館西部地区バル街」は今年も春・秋の2回開催された。4回目の9月27日は晴天にも恵まれて、参加店が44、参加客も約2,100人といずれも過去最高を記録した。すっかり西部地区のイベントとして定着した感のあるバル街。今回旧英国領事館も初参加、喫茶レストランがバル街に参加したほか、庭園でのコンサートや領事館内部の夜間開放などが実施された。各所で音楽ライブや路上パフォーマンス、さらに深夜の「お帰りバス」の臨時運行など多彩な企画で深夜12時まで、十字街・西部地区のあちこちが乾杯と談笑で賑わった。「旧市街」での夜遊びの「楽しみ」再発見に向けたスマートな挑戦はいまや全国規模でも注目を浴び始めている。さらなる発展を応援したいものである。

○詳細は公式サイト <http://www.bar-gai.com>

六月のまち

茨木のり子の詩「六月」は「どこかに美しい村はないか／一日の仕事の終りには一杯の黒麦酒」で始まるが、第2連は「どこかに美しい街はないか／食べられる実をつけた街路樹が／どこまでも続き すみれいろした夕暮れは／若者のやさしいさざめきで満ち満ちる」とうたわれている。むろん茨木さんはまちづくりの専門家ではなく、またこの作品全体には「戦後」を濃厚に反映した希望、理想がこめられているので、まちづくりの詩として読むのは本筋ではないけれども、「まち」と「理想」ということをたまに思う時に、この詩が浮かんでくるのが自分にはある。もっともそれは「一杯の黒麦酒」のほうに引きずられているのかもしれないが。

まちは本来、人の生活の機能が分化したことを肯定した場としてつくられた。食料を生産（狩猟・漁労による確保）しなくても生きていける場としてのまち。「からトラスト」の函館も、本州の都市のような長い伝統はないといっても、開港以来でもすでに150年近く、その成り立ち、繁栄の仕方、人の集まり方から、十二分に「まち」であることはまちがない。

しかし今日、21世紀初頭の函館のまちとしての快適度はそう高くない。それを測る物差しは人それぞれだろうが、分化した機能がまんべんなく身の回りにある、という状態が欠けていっている。「お店屋さん」が間引きされ、遠いところに「大型」で集中する傾向が加速している。「お店屋さん」の一つである「本屋さん」となれば、「大型」すらない。小型・中型も特に西部地区では数えていくつというほど少なくなり、「読むもの」を獲得しようという気分、すなわち立ち読みをする場が消えていってしまっているのだ。

本屋さんをもってまちの代表とするわけではないが、常に「さわれる」状態にないものが数多くなれば、それは「イナカ」ということになる。本当の田舎は田舎として豊かだ。そこに住む人は、生産に携わっているかどうかも含めて田舎を必要としている。しかし、まちの中のイナカは失われた機能の言い換えであって、どんな夕暮れもすみれ色に見えなくなってしまうかねない。

何々のグローバル化ということがよく言われるが、まちもグローバル化して、つまり地図上の境界線はありながら生活はもはや地球化してしまっているのだろうか。函館だけがそこから自由なまちとして、独自の人間社会を作るということは現実には考えられない。しかし、150年のまちとしての歴史が作りあげてきた他にはない特徴がこのまちの魅力をつくりあげているのなら、少しでも快適に暮らいうるまちという理想をその特徴に上乗せして、少しだけいばって気持ちよく暮らしてもいいはずだ。ささやかであるにしろそのような理想が根底にないまちづくりは、経済のための経済としてしか機能しないように思える。函館旧市街であれば、一見した古さの中に現在の生活の機能が収まっていて、そのあんばいを楽しむことができる生活。年寄りの笑い声だってすてたものではないと思うのだが。

西部町並みクラブ会員

公益信託函館色彩まちづくり基金運営委員

加納 諄治

「港にカクテルを灯す」

「旧棧橋を一夜のバーに」



▲告知ポスター

05年8月30日、市内末広町の旧棧橋（東浜棧橋）でモバイル・バー・カウンター・プロジェクトという名前のイベントが実施された。かつて本州からの連絡船客が函館への第一歩を記した場所である旧棧橋はいまや「観光スポット」になっているが、ここを「一夜限りの現代的なバー」に変身させるという意欲的な試み。慶応大学の学生らが企画・運営、バーは市内の老舗「杉の子」が出店。約250人の市民らが夜遅くまで、輝く光に照らされた4色のカクテルや生ビールと、港内の夜景を楽しんだ。歴史を背負った公共空間をまったく新しい視点で活用する試みがもたらす「発見」の試みが更に広がっていくことを期待したい。



■奥谷畳店

建築年 1921年

炎天下で二日間がんばりました。ペンキを塗り終えた後、建物主さんに「ありがとう。」とお礼を言われたことがうれしかったです。

■MOSSTREES

建築年 1951年

壁面積が大きく、二日間で塗りきれぬか心配していましたが、たくさんの方が参加してくださったおかげで無事きれいに塗り終わることができました。

第13回助成活動募集のお知らせ

■募集内容

函館のまちづくりに関わる市民レベルの様々な活動や研究、企画。応募資格は函館市民に限りません。

■応募期間

平成17年12月～平成18年1月末日

■審査方法

公益信託函館色彩まちづくり基金運営委員会による審査を行い、その結果をふまえて住友信託銀行が決定します。

■運営委員

- ◎ 荻澤 憲吉 (函館工業高等専門学校環境都市工学科教授)
- ◎ 加納 諄治 (編集室Kandh)
- ◎ 角 幸博 (北海道大学大学院工学研究科教授)
- ◎ 野々宮 勇 (函館市都市建設部長)
- ◎ 小澤 武 (建築家・小澤建築研究所)
- ◎ 二本柳 慶一 ((株)二本柳慶一建築研究所)
- ◎ 腰山 みゆき (オフィス NORD)
- ◎ 佐々木 貴子 (北海道教育大学教育学部函館校 家政教育講座助教授)

■審査発表

応募者全員に通知。「から」24号でも発表します。

■助成金額

原則として1件あたり10万～100万まで。

■活動報告

助成を受けた活動は平成18年の8月に活動の中間報告と平成19年の3月の最終報告をお願いします。

■基金受託者

住友信託銀行 リテール企画推進部 公益信託チーム
〒100-8232 東京都千代田区丸の内1-6-1
TEL 03-3286-8218
FAX 03-3286-8792

■応募用紙請求・応募宛先

函館からトラスト事務局
〒040-0001 函館市五稜郭町19-15
Tel: 0138-52-8411 日昇商事内
〒064-0915 札幌市中央区南15条西17丁目4-30
Tel: 011-513-0977 プラハまちづくりセンター
※ホームページからもダウンロードできます。

編集夜話

何かと慌ただしいこの師走、振り返ってみると函館西部地区は様々な楽しいイベントに彩られた一年だった。現在も海にクリスマスファンタジーの巨大ツリーが輝いている。第4回バル街は44店舗の参加でおこなわれ、市電まで動員して、約2100人が各店を行ったり来たりの大賑わいであった。

4月に開かれた、〈函館の歴史的風土を守る会主催〉による函館市合併記念の「函館の近未来都市像シンポジウム」は荻沢運営委員長もパネリストの一人として参加した。函館の町のもつ魅力を様々な視点から今後の新しいまちづくりに向けて繋げていく楽しい内容であった。

町を愛する市民の意欲は旺盛で、函館市の財政難によるまちづくりのスピードダウンも恐れることはないと思える。

私の住む二十間坂は夜更けてイルミネーションも消され静まり返っているが、函館山から下りてきたキタキツネが一匹、大きな街路樹の下の雪をなにやら掻き分けている。その木は時折、人が幹に手をかざしている古木である。靈験あらたかにご利益が出るかもしれない。それにしても、夕食の味噌汁の油揚げは多すぎたかなと思う。

12月13日深夜(河内)

から第23号 発行：函館からトラスト事務局 発行年月日：2005年12月28日 編集：河内昌子
〒064-0915 札幌市中央区南15条西17丁目4-30 Tel: 011-513-0977 プラハまちづくりセンター
〒040-0001 函館市五稜郭町19-15 Tel: 0138-52-8411 日昇商事内
からトラスト公式ホームページ：<http://www.h-nisshou.com/kara/>